

大唐三藏聖教序



太宗文皇帝製

和福寺沙門懷仁集

右將軍王羲之書

蓋聞二儀有像顯霞載

「落ち穂拾い記」③〇『集王聖教序』（上）

近拓 明拓 宋拓



〔図版④〕

高陽 県

文字の字画の大小



〔図版③〕

集王碑

蘭亭



〔図版②〕

〔沈曾植跋文〕
聖教序本斷者為北宋本初斷者南宋本三真俱分者次之故字未換者次之在字未換者又次之或又三真俱在者南宋本亦不換否固初分收應家言此與余於此性性不近不能決擇也此冊石字未換而紙墨入精始存一筆以資改詳光緒壬寅夏月軒識

〔蘇文題跋〕
聖教序本斷者為北宋本初斷者南宋本三真俱分者次之故字未換者次之在字未換者又次之或又三真俱在者南宋本亦不換否固初分收應家言此與余於此性性不近不能決擇也此冊石字未換而紙墨入精始存一筆以資改詳光緒壬寅夏月軒識

蘇文題跋 李凱 三真上

〔奉橋帖〕との比較



集王碑



〔図版⑤〕

〔図版⑥〕

書聖・王羲之の書を学ばれた方は、一度は『集王(子)聖教序』を手本とされたことがあるであろう。唐の弘福寺の僧懷仁らにより、当時伝来する王書の墨跡資料を基に集字して、咸亨3年(72)に建立された集王聖教序碑は、古くから王羲之の確かな真跡が伝来しない為に、唐時代における王羲之の書法を伝える最高の書跡資料である。碑文の文字を現在伝来する王羲之の『蘭亭序』等の模本の墨跡資料と比較すると、確かな特徴をそなえた類似点を見ることが出来る(図版②)。使用されている文字の大きさも大きく異なるものもあり、まさに「集字」された趣を如実に示している(図版③)。

この原碑が西安の碑林博物館に保存されている。今日まで長きにわたり取拓され、書の範本とされてきた。江戸時代の後期には、原刻拓本が伝来し、日本でも手習いの範本とされた。当時、原刻拓本は、貴重であり、需要が多かったのであろうか、各種の翻刻拓本が制作された。日本には、多くの原刻拓本が伝えられている。清朝の初期や明拓などのやや古い拓本も目にするが、宋拓と称せられる善本は、得難い。以前、都心の古書店で、戦前に輸入された、巻末の「高陽県」等の文字の残る明拓の剪装本を入手したが、宋拓本の優れた影印資料等と比較すると、碑文全体に斜めに大きく断裂し、断裂部分にあたる文字は、破損し、文字の伸びやかさがやや劣り、筆画の抑揚が、微妙に異なり、宋拓本には及ばない(図版④)。しかし、この帖には、巻末に清末民国期の大学者・沈曾植(1850~1922、清末民初の官僚・歴史家。字は子培、号は巽齋または乙盦、晩年は寐叟と号した)の二件の跋文が付されている。『集王聖教序』の新旧を独特の書法で記している。両跋とも沈曾植の『海日樓題跋』集に収録されている。特に最後の跋は、沈曾植の題跋を活字に直さず筆跡のまま収録した『寐叟題跋』の二集の上冊にみる事が出来る(図版⑤)。

この家蔵本の跋がそのまま収録されており、大変珍しい拓と言えようか。

伊藤滋(書齋名・木鷄室)

書道芸術院

令和の群像 (2022)



武山 櫻子 書



武山 櫻子

掲載の作品は、平成23年7月、毎日アートサロンでの「毎日展中国研修団」の帰国展に出品したものです。同年の3月11日の東日本大震災で住まいと稽古場が全壊の被害を受けましたが、流出せずに済んだ筆を瓦礫や汚泥の中から拾い出して書いた作品です。社中の

ほとんどの方も被害に遭われ、震災当時は何も考える事ができずに過ごしておりましたが、辻元大雲先生、毎日書道会の糸賀様方々が気仙沼にお見舞の訪問にいらしゃり、私たちを励まして下さいました。それがきっかけで社中の皆さんとその年の毎日展にも出品する事ができました。多くの皆様の励ましがあったからこそと感謝しております。

父、武山櫻光の教室を継いで23年余り、震災から11年が過ぎ、未熟で何もわからず飛び込んだ書の世界。そんな私を師として今日までいつも温かく見守り育ててくれた社中の皆様、本当に有難うございます。昨年の宮城野書人会展に「生かされて感謝」と書いた作品を出品しましたが、震災で生き残っ

たからと言う事だけではなく、こうして書道を22年間続けて来られたと言う事への感謝の意味なのです。

私はいつも作品を書く時は、その作品に景色が見えるか、情景が感じられるかという事を大切に思っています。そして、その詩文に合った自分なりのさまざまな書き方で表現する事を心掛けて筆を持つと、ふとした運筆で思いがけない線が生まれたりします。掲載の「白い鳩のように……」も、そうだった様な記憶があります。

48歳で書道を本格的に始め、師を持たず独学で古典等を勉強して来ましたが、現代詩文書では辻元大雲先生、坂本素雪先生からご指導を頂戴し、書道芸術院の諸先輩の方々からも多くの刺激を頂いて今日に致っております。まだまだ未熟で、もっともっと精進せねばならないとこの歳になっても強く思っております。ただ、基本は楽しく書く事です。書友や社中の皆様との関わり合いを嬉しく感じ、まだまだ精神年齢は若いはずと自分に言い聞かせて毎日を過ごしていきます。

書のひろば

理事長 辻元大雲

令和4年度公益財団法人定例理事会 令和3年度事業報告・決算など

3月事業計画・予算案などを審議に続き、5月7日本院事務所にて令和3年度事業報告、決算などを審議した。3月に続き対面での理事会開催は、コロナ禍の折の書面審議と異なり、本来の理事会のあるべき姿を呈していた。当日午前中に院監事による監査が行われ、青木法律会計事務所所長青木康國様、担当の瀬川様、院幹部(理事長、常務理事3名) 同席にて滞りなく行われた。

- 午後2時から財団理事18名出席(2名欠席)にて理事会開催。
 - 議事、審議事項
 - 令和3年度事業報告および決算承認
 - 定時評議員会の招集
 - 重要な使用人の選任及び解任
 - 事務局長(山口仙草から片岡豪峰に交代、次長に佐藤菜扇、その他事務局体制の一部変更)
 - 第76回書道芸術院展関係人事(参与会員、常任総務、総務への昇格人事、復帰・退会・逝去)
 - 第76回書道芸術院展、第74回全国学生書道展各部長の選任など)
- 詳細は次号の院報にてご確認いただきたい。



理事会会場風景

今後の第75回記念書道芸術院役員 作品巡回展(7月まで)

- ・6月16日～19日 九州支局展
コスメイト行橋
- ・7月14日～18日 山陰支局展
倉吉博物館

第73回毎日書道展公募、会友搬入 状況 鑑別審査は5月27日から

昨年一年遅れで何とか開催に漕ぎ着けた毎日書道展は、鑑別審査方式を71回展並みに戻して、通常通りの運営を目指している。出品状況は別掲の通りだがやはり減少傾向は止まっていない。本院の状況も同じで今後への対応が迫られる状況である。

5月27日～29日、国立新美術館にて刻字部を除き未表装による鑑別が行われる。コロナ禍への配慮などを綿密に行い、間違ってもクラスターなどが起きないように、関係者は細心の注意を払いながらの運営となる。

第73回毎日書道展出品状況 2022.5.27現在

	漢I	漢II	かI	かII	近詩	大字	篆刻	刻字	前衛	計
公募	2919	4566	1141	1318	3857	1308	278	582	898	16867
会友	1380	986	222	699	1337	402	78	56	262	5422
U23	285	491	87	94	589	168	45	21	47	1827
73回展計		10627		3561	5783	1878	401	659	1207	24116
72回展		10903		3798	5864	1898	424	670	1298	24855
		-276		-237	-81	-20	-23	-11	-91	-739
院(全)		372		261	415	171	0	42	355	1616
72回展		351		267	421	186	0	52	393	1670
		21		-6	-6	-15	0	-10	-38	-54

7月1日～3日、会友作品を含め入選上位作品と共に入賞審査が行われる。会員賞選考は7月6日、文部科学大臣賞選考は同7日に開催される予定。

**公益社団法人全日本書道連盟
第182回理事會開催**

5月12日上野精養軒にて通常理事会が開催され、総会議事などを審議した。書写書道教育推進協議会、日本書道ユネスコ登録推進協議会活動報告

令和3年度助け合い募金報告

今回は維持団体、賛助団体からの募金をお願いし、本部会計からの補填を含め200万円を日本赤十字社へ寄付

を行った。

・定例総会(6月2日14時、上野精養軒)開催時に書写書道教育講演会を開催する。

演題「不器用さがある子どもの書字動作の特徴と書く力を伸ばす身体を使い方について」講師 笹田哲氏(神奈川県立保健福祉大学教授) 参加無料一般も可。100名定員、是非ご参加を

・令和4年度夏期書道大学講座開催
8月5日～7日 池袋サンシャインシティ(科目一覧などは別掲参照、ただしコロナ禍により定員は50名程度の予定)

・創立70周年記念事業「書塾ハンドブック」の発行(6月下旬位を予定)

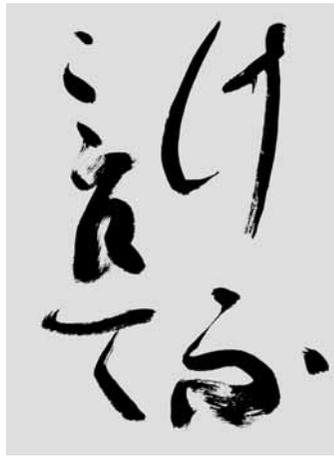
第56回高野山競書大会審査

本院会員からも多数出品協力いただいている高野山競書大会は今回56回大会を迎え、審査長を辻元大雲が務める。コロナウィルス蔓延の影響下、審査会は通常の和歌山県高野山金剛峯寺から昨年に続き高野山東京別院にて行われる。本院からも運営副委員長として種谷萬城、運営委員に下谷洋子、当番審査員として辻元大雲・種谷萬城・千葉蒼玄。審査事務員 前田龍雲、九條純代、佐藤菜扇が担当する。

審査日程 6月2日～5日
展覧会会期 8月1日～15日
展覧会会場 高野山金剛峯寺
表彰式 8月5日(金剛峯寺)
東京展 8月26日～28日(品川)

【臨書から現代詩文書への展開】

①温泉銘風のひらがなの表現方法



- ・ 気宇雄大な書風に調和するひらがなに「十五番歌合」を参考してみた。
- ・ ひらがなの造形については字母を念頭において書くことが大切。

②温泉銘風の現代詩文書



「山國の空に山ある山櫻」

三橋敏雄句

- ・ ゆったりとした動きのなかに骨力のある線で二行並列構成で書いてみた。
- ・ 山深い山村にも春爛漫の季節を迎えた喜びを楽しむ筆致で筆を走らせた。少々字形の取り方が真面目すぎたようにも思った。漢字を敢えて旧漢字にしたせいかもしれない。
- ・ 新旧交えての使用は不可だが、どちらかに統一しての使用は認められている。

(毎日書道展の場合)

基礎基本講座

前衛書基礎基本講座 (1)

前衛書とは何だろう。「前衛」とは最先端という意味であるから、他の部門の人からは「読めない字を激しい線で書いたわけのわからないもの」のように思っている人も多いのではないかな。

この「わからない」ことの原因は、考え方も表現方法も違うものすべてを、前衛書という呼び方で一括りにしているところにある。言い換えれば、書の部門(漢字、かな...)に属さないものすべてを前衛書と呼んでいるからである。

漢字でもかなでも、作品を作る場合、過去の作品を写しては、自分の作品とはなりえない。何か新しい自分なりの美しさをその作品に表現したいと思うはずである。これが前衛精神である。ただ前衛書では、だいたい違う方法でその方法が作品を作っている。

次回から、この方法について詳しくほぐしてゆくが、技法、考え方は表現方法という末端を話す前に、その基礎知識として何を前衛と呼

んでいるかについて考えてみたいと思う。

- 芸術、文化、前衛
- 文字の歴史からみた前衛
- 毎日書道展の部門
- 可読性
- 前衛書の部門、会派の考え方

掲載の作品は、大澤雅休「黒岳黒溪」であるが、現在からみれば漢字部門の作品が、その当時は斬新すぎる作品として、日展陳列拒否になった。どの時代でも新しい仕事は、体制派からは排斥されるものであるが、この作品が書道芸術院の前衛精神の出発点であろう。



「黒岳黒溪」

大澤雅休書

令和4年度 新審査会員作品

||

市川 将義 (漢)・清水 蘭舟 (漢)・富原 扇水 (漢)・石崎 甘雨 (現)



市川将義
(大阪)



「星」

この度は、審査会員にご推挙いただき誠にありがとうございます。日頃から熱心にご指導くださる小林琴水先生、書道芸術院の諸先生方、書友のおかげと感謝申し上げます。この作品は、夜空に輝く星を表現しました。今後も古典を学び研鑽を重ねて参りたいと思います。

(将義)



清水蘭舟
(広島)



「怡然余楽あり」

すごい、踊る様に動く筆、故竹本龍汀先生に入門時の感想でした。その上楽しそうに書いている藤井龍仙先生以下社中の書友。山陰支局の先生方にも指導を受けられる幸せ。様々な幸せを感じながら「怡然有餘楽」と精進いたします。審査会員昇格誠にありがとうございます。

(蘭舟)



富原扇水
(兵庫)



「無我夢中」

この度の審査会員昇格大変光栄に存じます。小林琴水先生はじめ諸先生方のご指導と家族の支えに感謝いたします。書を通して心身ともに成長できるよう過ごして参りました。これからも楽しく生きがいを持って末永く書に向き合い、「無我夢中」で書の道に精進していきたいと思えます。

(扇水)



石崎甘雨
(神奈川)



「ペーパーミントの静寂

ふと筆を置き」(自詠)

母が他界してまもなく、師匠の小池隣舟先生に出会いました。この度の審査会員への昇格、さまざまなご縁に感謝申し上げます。

(甘雨)

※7月号でも引き続き、新審査会員の紹介をいたします。

書道芸術院創立75周年記念

役員作品巡回展

併催 第62回北陸支局展（書徑舎展）

会期 令和4年4月8日（金）～10日（日）
会場 富山県高岡文化ホール

1階 多目的ホール
2・3階 展示室

実行委員長（北陸支局長）

田 守 光 昭

書徑舎展は、毎年夏に開催してまいりました。本年は役員作品巡回展の日程と考えあわせ4月の開催となりました。書徑舎会長大石仙岳を中心に前年より事務局（事務局長・宮崎芳玉）が綿密な計画のもとに準備を進めてきました。富山県高岡文化ホール全館を借り切り、4月7日（木）搬入を開始し、津田海仙相談役の指示により陳列作業が始まりました。

1階は書徑舎展の目玉である大作4点（宮崎芳玉、須藤彰仁、山田明子、石黒和喜）、第75回書道芸術院展書徑舎入賞作品10点、書徑舎会員作品12点、第73回全国学生書道展における大賞受

賞作品と北陸支局の出品者作品。2階は書徑舎会員の作品15点、色紙34点を展示。3階は巡回展役員作品63点、香川峰雲先生遺作10点、書徑舎会員の作品6点、全体で154点の展示となりました。東洋額装様、キョー和様のご協力により、作品間隔、配置もよく明るい陳列となりました。

8日（金）からの開催期間中は好天に恵まれて、高岡古城公園の桜も展覧会に合わせたように満開となり、まさに花を添えてくれました。地元北日本新聞社、毎日新聞富山支局の取材を受け、「特に歴代会長及び香川峰雲先生の遺作コーナーは素晴らしい」「北陸では見る機会が少ないので是非名作の数々を味わって欲しい」との記事が掲載されました。他に巡回展の作品にも感動の声が多く寄せられました。

9日（土）午後、辻元大雲理事長と小竹石雲常務理事が来場下さいました。

須藤彰仁の司会で北陸支局長（田守光昭）挨拶の後、両先生のお言葉がありました。辻元先生は芸術院誕生から、コロナ禍でも各行事は休むことなく続いてきたなど、書道芸術院の流れを話され、北陸は深松海月先生や浜谷芳仙先生の強いベクトルが支えであり、次の世代へ書の楽しさを伝え仲間を増やしてほしいとのメッセージをいただきました。

小竹先生は巡回展の意義を細かく説明され、また香川峰雲先生の遺作にふれながら書道を次の世代につなげるために若い力が必要であると強調されました。

その後、辻元・小竹両先生による色紙と半紙の作品揮毫がありました。色紙のまとめ方や筆遣いなど大変勉強になり、好評でした。

コロナ禍の中での入場者数が予想よりも多かったことは、巡回展と同時間催であったことが影響していると思われまます。関係者のご協力で感謝いたします。

コロナウイルス感染防止の為、祝賀会や書徑舎学生展が中止になったことは大変残念でした。最終日は、午後3時より撤去、搬出作業を行い、全てを無事に終了することができました。



会場入口



書徑舎展 色紙作品



書徑舎展 大作4点



巡回展役員作品



第75回書道芸術院展 書径舎受賞作品



辻元大雲理事長による色紙揮毫



巡回展役員作品



辻元理事長あいさつ



小竹石雲常務理事による半紙揮毫



辻元理事長による作品解説



小竹常務理事あいさつ

書道芸術院創立75周年記念

役員作品巡回展

併催 山陽支局展

特別展示 香川峰雲の世界
含 学生書道展

会期 令和4年4月19日(火)～24日(日)
会場 岡山県天神山文化プラザ

第一、第三展示室

実行委員長(山陽支局長)

大平 邑峰

山陽支局における書道芸術院創立75周年記念役員作品巡回展は、歴代会長遺作と財団役員作品合わせて63点を展示、特別展示として香川峰雲先生の遺作16点を展示いたしました。併せて第75回記念書道芸術院展における支局内無鑑査以上の出品者全員、一般公募は入賞者を対象に出品を募り、146点の出品がありました。この他学生展上位入賞者と支局内特別賞入賞者作品を加えて支局展を開催することができました。今回展は、コロナ禍中での開催とな

り、懇親会は行わず、研究会もコロナ対策を講じた上での開催となりました。多くの来場者をお迎えしたいという思いと感染予防の観点から密にならぬようという相反する対応をバランス良く行うことに終始腐心しながらの従来にない運営となりました。

20日には辻元大雲理事長、24日には下谷洋子常務理事にお越しいただき、研究会を開催しました。参加者を会場と別室の会議室(インターネットを介したライブ中継)に分け、辻元先生、下谷先生とともに熱弁を振るってくださり、皆さん熱心に聞き入っておりました。辻元先生には、香川峰雲先生にまつわるお話と支局に対する思いとして自分の顔の見える作品作りをとのご指導をいただきました。下谷先生は、院の特色について巡回展の作品の解説を通してご指導くださいました。また、研究会の最後に下谷先生から祝意の念を入れていただいた院展受賞者へのバラ一轮の贈呈は、ささやかではありましたがメモリアルなイベントになりました。地方にいる私たちとしましては院を身近に感じ、各自の書への取り組みの指針になったのではないかと思っています。(研究会の様子は、YouTube

にアップしていますのでご覧ください)

岡山の地は、漢字・仮名の伝統的な書が強く、詩文書や前衛書、篆刻、刻字に関わっている人は少ないという地域性があります。直前の週に県書壇全体が集う岡山県書道連盟展が同会場で開催されたばかりで、その余韻漂う中での本展開催となりましたが、展示作業を終えると雰囲気は一新されて、現代性に富む様々な書表現を楽しんで頂ける展観になったのではと感じています。また、香川峰雲先生の篆刻と刻字の遺作はインパクトは絶大で、永年の修練の上に立った現代感覚溢れる作風に感激の声が多く聞かれました。

準備段階から最終日を迎えるまで行き届かぬ点もあったかと思いますが、巡回展担当常務理事の小竹石雲先生のご指導や院事務所、支局役員・出品者の献身的な協力により、無事展覧会を終えることができましたことに感謝申し上げます。報告とさせていただきます。



巡回展 歴代会長遺作



「香川峰雲の世界」のコーナー



山陽支局展（第一会場）



巡回展役員作品



学生展作品展示風景



山陽支局展（第二会場）



4月24日下谷洋子常務理事をお迎えしての研究会



4月20日辻元大雲理事長をお迎えしての研究会



院展受賞者にバラの花贈呈



巡回展役員作品解説（下谷先生）

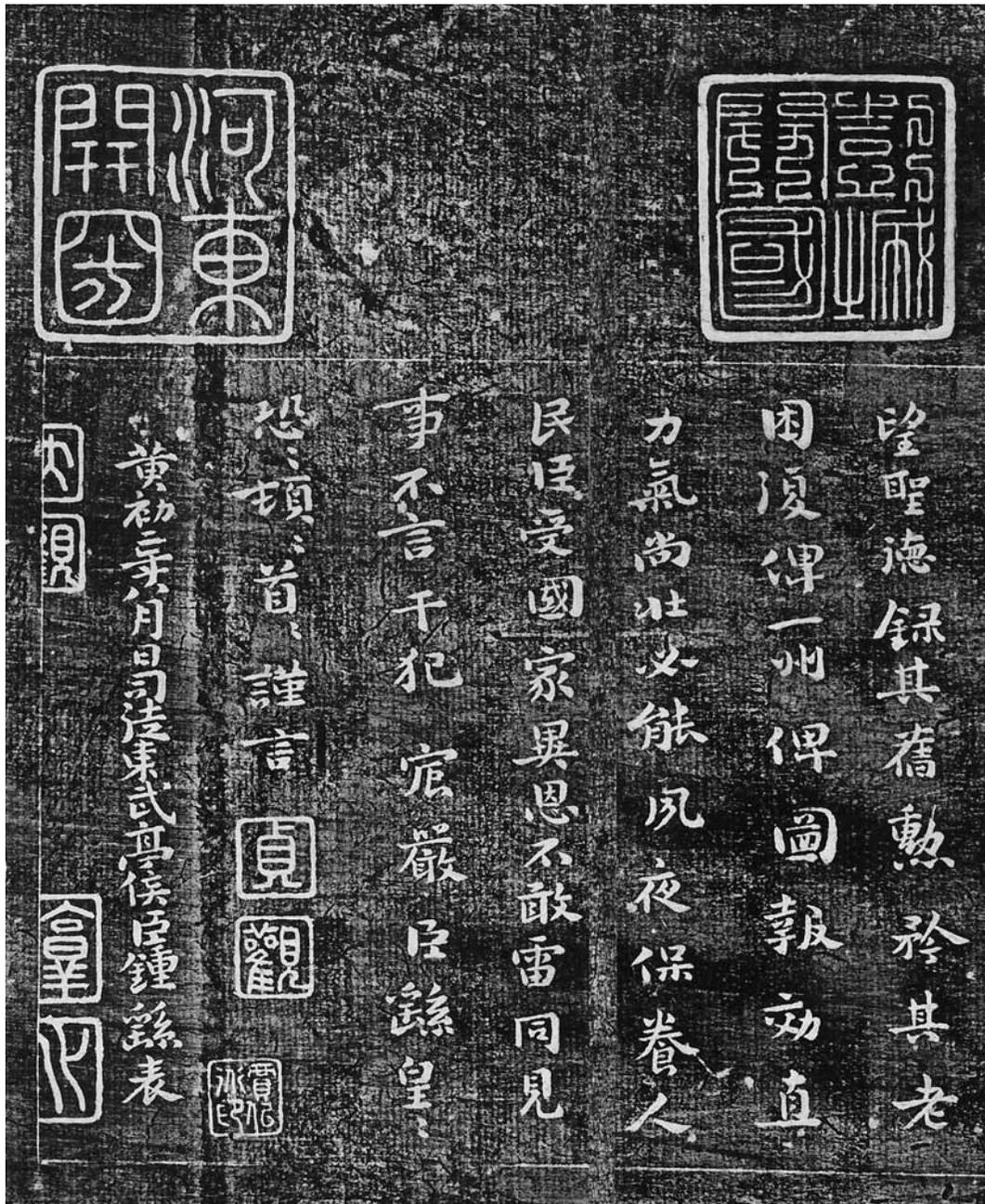
薦季直表 (魏・鍾繇) ③

漢字研究部臨書課題

|| (半紙普通判・縦使用) 左記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

|| (A. 大作の部 毎日展覧会員・倉庫サイズ以内 2×6尺・全紙も可)
(B. 小品の部 半切以上切以内 全紙約68cm以内 奇縦横用) 当該古典の左記掲載部分以外も可。



(掲載図版・85%に縮小)

〈真賞齋帖より〉

〈釈文〉

望するに、聖徳もて其の舊(旧)勲を録し、其の老因を矜れみ、一州を復せしめ、報効を図らしめよ。直は力氣尚お壮なり。必ず能く夙夜人民を保養せん。臣は國家の異恩を受く、敢えて雷同せず。事を見て言わざれば、宸嚴を干犯せん。臣繇皇恐皇恐、頓首頓首、謹んで言す。

黄初二年八月日、司徒・東武亭侯・臣鍾繇表す。

〈解説〉

三国時代、魏の鍾繇(151-230)は、秦の李斯、漢の蔡邕・張芝と並んで、王羲之以前の中国書道において極めて著名である。また、孫過庭の「書譜」の冒頭にも「夫れ古より書を善くするものに漢魏に鍾・張の絶あり、晋に二王の妙を称す」と、六朝以前の四大家の一人に挙げられている。

薦季直表の他に鍾繇の書として「宣示表」「賀捷表」「力命表」「墓田丙舍帖」などの細楷が、石に刻されて法帖となって伝えられている。(編集部)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

古筆鑑賞

219

高野切第一種
高野切第一種
(伝紀貫之)

③

〈よみ〉
可^か筆^すみ^たち^この^めも^はる^のゆ^きふ^れば
ハ^支な^きさ^とも^はな^ぞち^りける

はる^のは^じめ^によ^める
ふ^ちは^らの^こと^なほ

は^るや^とき^はな^やお^そき^とき^わか^む
う^ぐひ^すだ^にも^なか^ずも^ある^かな

かな研究部臨書課題
特別研究部臨書課題

△半紙普通判(料紙可)・縦長に使用
別紙を裁断して貼付も可。半横紙は半紙サイズに切って使用のこと。
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)
A. 大作の部 毎日展覧審査員・会員サイズ以内(2×6尺・全紙も可)
B. 小品の部 半切以上、半切以内(縦横自由)
△いずれも左記の掲載以外も可。V

〈解説〉

高野切の筆者は、古來紀貫之(861?~945)と伝承されてきたが、11世紀中頃の3人の能書が寄り合って「古今和歌集」の序および全20巻を分担執筆したものである。
高野切の現存遺品を書風別にみると、

第一種：巻一・九・二十
第二種：巻二・三・五・八
第三種：巻十八・十九

を写真したと推定される。

この3人の中で、最初と最後および全巻の表紙の題字を書いたとされる「高野切第一種」の筆者が筆頭の執筆者でもっとも能書として地位の高い人物と考えられる。

「高野切第一種」は、数ある名筆の中でも類を見ない品格を誇っている。この筆者は、まさに当代随一の能筆であったことをうかがわせる。

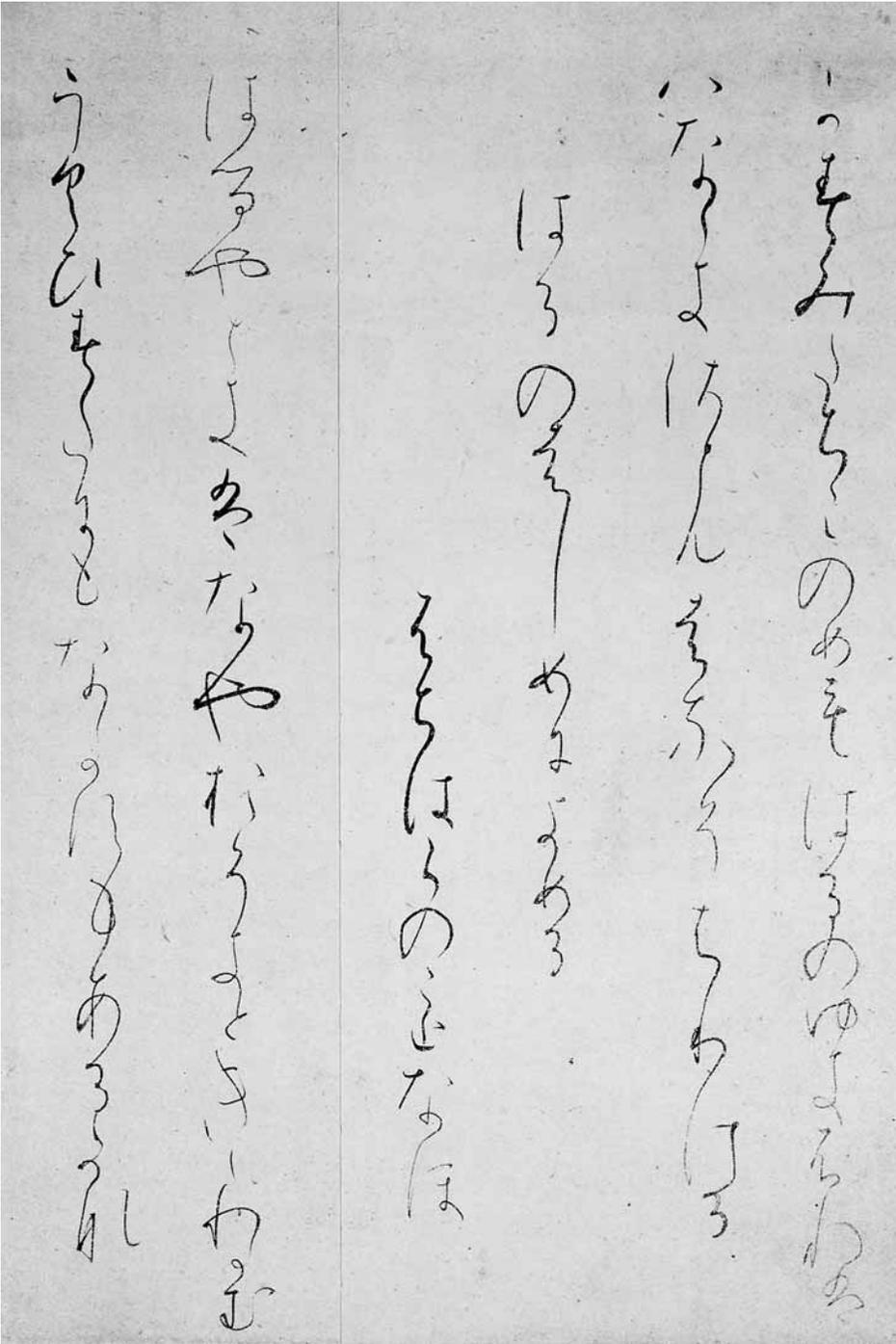
(編集部)

※古筆は原寸(以上も可)で臨書しましょう。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

(遠山記念館蔵)

※掲載図版・75%に縮小



漢字規定 初段以上 【七月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲 選書



筆陣書林

よみ (筆を陣し書林とす)

書体 自由

習い方解説 (三)

辻元大雲

筆陣書林 「墨場必携統対句選」
(筆を陣し書林とす)

詩文の雄健なことで多くの書籍という意味で、学問の大切さを訴える語句です。

今回もやや平板な行書中心に表現してみました。少し肉厚な重厚さを意図しています。穂先の開閉による太細の変化が、じっくりとした味わいを醸し出すことを狙っています。落款は本文の表情に合わせて調和させたいものです。

漢字規定 秀級以下 【七月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

半田藤扇選書



賞花釣魚

よみ (花を賞し魚を釣る)

書体Ⅱ楷書

習い方解説 (三)

半田藤扇

賞花釣魚 「現代書作必携」
(花を賞し魚を釣る)

今回は、北魏の楷書を取り入れてみました。荒削りな部分が多く、素朴・雄渾な書で、決まった書法が存在せず、10個書蹟があれば10通りの書き方が存在します。

起筆・転折を角張らせて力強く線を引き、石をゴツゴツと刻むように書く方筆書法。六朝楷書の主流といえよう。

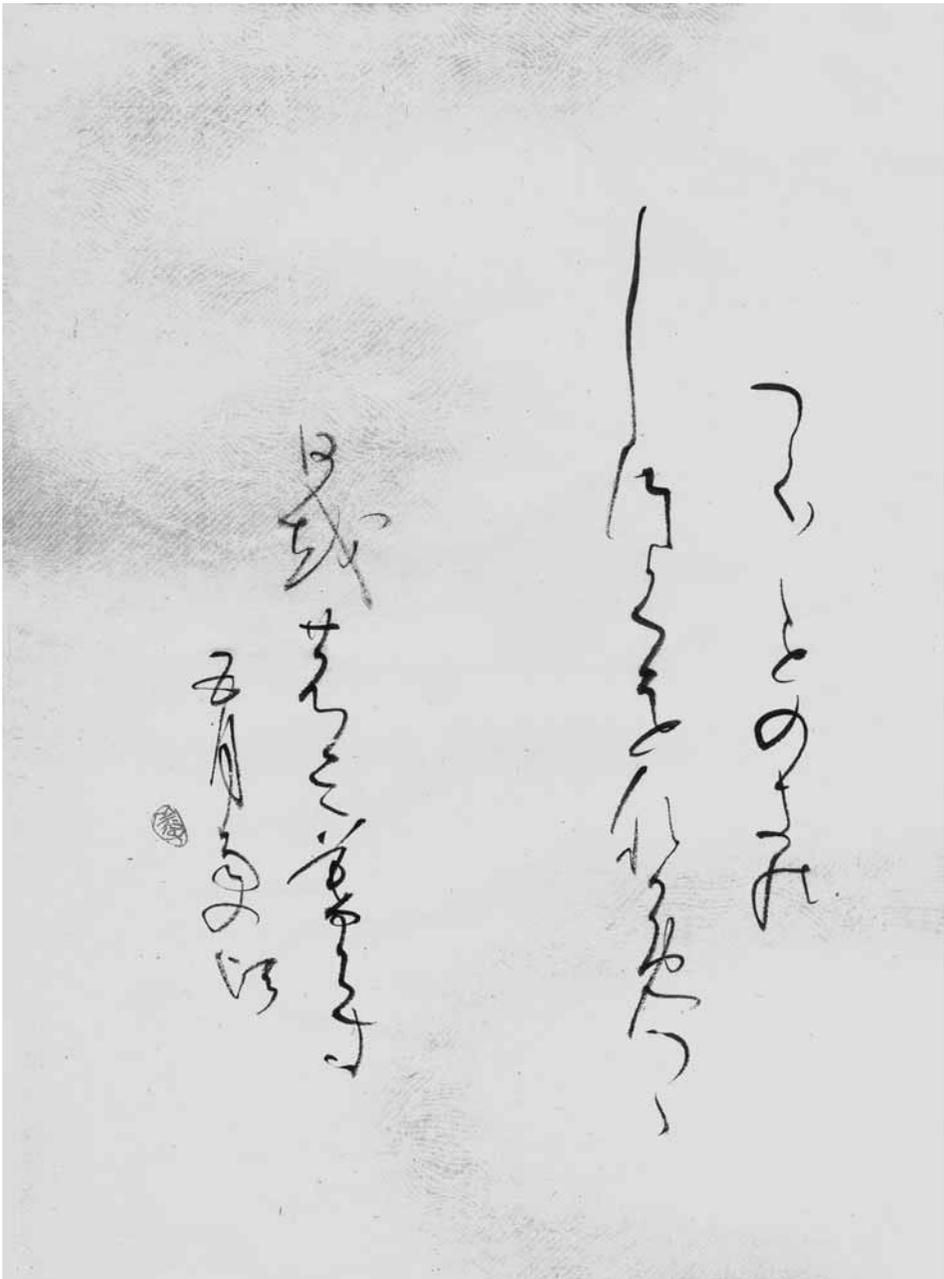
張猛龍碑や高貞碑など参考にするのもよいでしょう。現代中国では、魏楷・北魏楷とも称する。

※羊毛筆を使用

〈参考作品〉 孔子廟堂碑風



かな規定 初段以上 【七月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可) 下谷洋子選書



よみ方 つく(久)づく(へ)と軒(の支)の(能)筆(し徒久)をな(那)が(可)め(免)つ(川)つ(と)

日(を)越(の)農(み)三(暮)らす(寸)五月雨(のころ)頃

創作

* 料紙は半紙版(33.0×24.5cm)を使用しましょう。

習い方解説 ③

下谷洋子

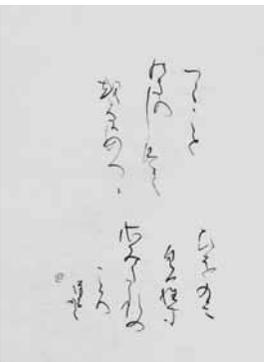
つくづくと軒の筆をながめつつ
日(を)のみ暮(さ)らす五月雨(のころ)

「山家集」

「しみじみと軒から滴る雨の筆を眺めながらただただ暮らしている五月雨(梅雨)の頃」の意。

かなは、チョットした線の方向・長さ・太細の違いで美しくなったり醜くなったりします。古筆から汲み取ることが一番ですが、たくさんのよい作品を見て、流れやリズムの美しさをつかみたいものです。美の基準はさまざまではありますが、先ずは、バランスよくきれいに流れることを目指して下さい。もちろん、文字の大きさも関係します。上下、左右の空きすぎや、字が小さすぎるなどは論外、全体をイメージすることも大切です。

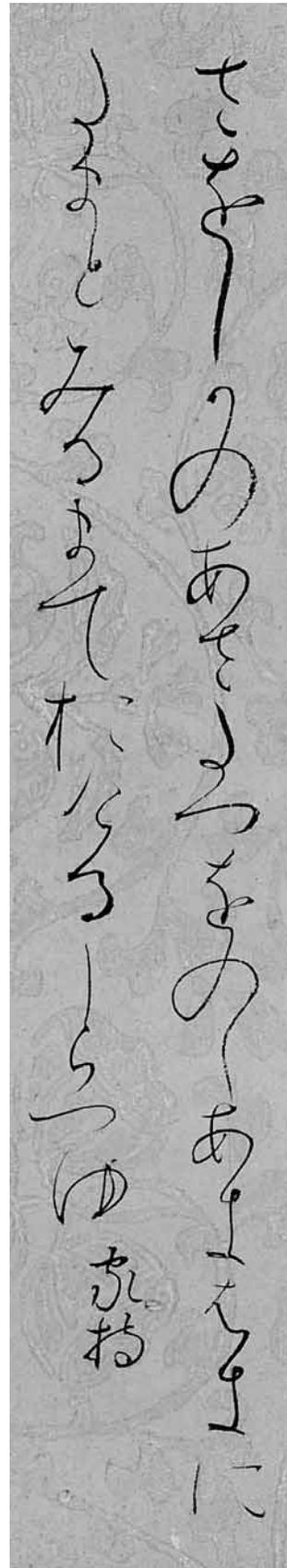
〈参考作品〉



かな規定 秀級以下 【七月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真の和歌を臨書する。または部分(2字以上の連続または単体を含む)を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大120%)



よみ方 さをし(可)のあさた(多)つをの(く)あき(支)は(者)ぎ(支)に
た(多)まことみるまでお(於)け(介)るしらつゆ家持

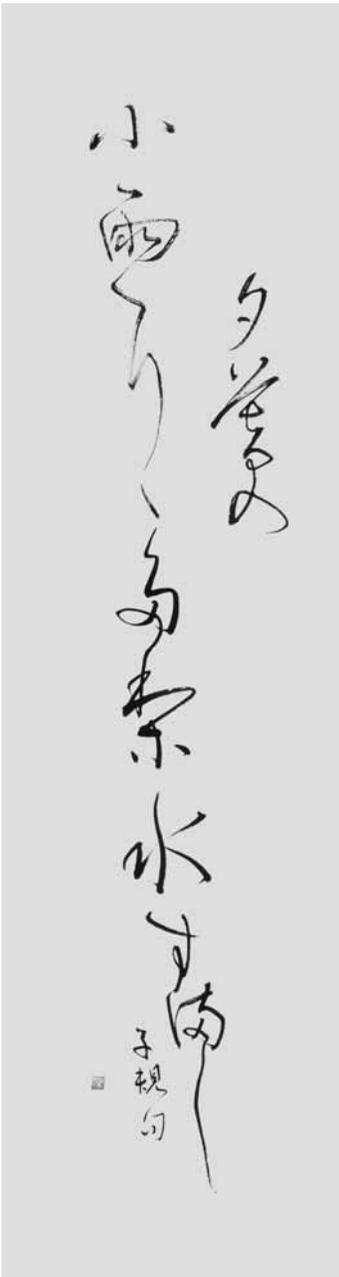
習い方解説 (三)

善養寺紅風

夕暮ゆふぐれの小雨こさるに似たりに水みづすまし
(正岡子規)

かな条幅規定 【七月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

善養寺紅風選書



よみ方 夕暮の小雨に(耳)似(く)た(多)り(梨)水すま(満)し 子規句

創作

俳句を配列する場合、字数が少ないため単調になりがちですが、横に張る線や、長く伸びる線などを配置し行の流れに変化を出しましょう。

書き出しは、墨量を少なく渴筆で運筆しましたが、墨継ぎの位置を変えることによって表情が違ってきます。段位の方は、構成を換えるなど試みて下さい。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【七月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

横看成嶺側成峯 遠近高低各不同
不識廬山真面目 只緣身在此山中

横看成嶺側成峯 遠近高低各不同 (蘇軾「題西林壁」)
(横より看れば嶺を成し側よりすれば峰を成す、遠近高低各同じからず)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【七月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

千葉蒼玄選書

簾前花落常疑雨 樹裡雲過忽見山
對裡雲過忽見山

簾前花落常疑雨 樹裡雲過忽見山 (殷邁)
(簾前に花落ち常に雨を疑い樹裏に雲過ぎ忽に山見ゆ) 書体||自由

説文篆文

樹

峰

習い方解説 (三)

種谷萬城

「横から見れば尾根続きの嶺で、側面から見れば切り立った高い峰。見る人の位置の遠近、高低によって山の姿が違って見える。」蘇東坡詩『題西林壁』の前半を草書で書きました。草書は流麗さと躍動感があり魅力的ですが、誤字になり易い書体です。まずは、王羲之、智永、孫過庭等から基礎をしっかりと学んで下さい。

※タテ形式に限る

習い方解説 (三)

千葉蒼玄

「簾前の落花は雨ではないかと疑われ、樹間の雲が去ると山が見えてきた」の意。

漢字は偏と旁で意味と音を表すが、その位置が違うものがある。例えば「樹」の字であるが、木が旁の上にあるものがある。これは古い篆書、または隸書からの造形である。峰などは古い字は「峯」の形である。「裏」と「裡」も同じ字であるが、どのように変化したのか推理してみるのも面白い。

ひとつよりふたつ
ひとりよりふたり
きつとそのほうが自然なんだ
妻と並んで枝豆をたべる
星野富弘「枝豆」 白琉書

書体＝自由

◇用紙 ハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

【注意】

用紙の大きさにばらつきが見られます。

用紙サイズ(14.8×10cm)を守って下さい。

習い方解説 (三)

北村白琉

この詩の作者星野富弘は、中学校の体育教師となって間もなく、部活指導中の事故のため、肩より下がすべて麻痺という苛酷な障害を背負わされながら、わずかに動かすことのできる口に筆をくわえて、自作の詩をつづり、絵を描かれるようになりました。以来40年余り活動を続けられ、命そのもののような詩と書画は、多くの人の心に感動を与え続けています。

肩の力を抜いて背筋をまっすぐに伸ばし、手元と目の間隔はなるべく空けるよう心掛け、正しい姿勢で書きましょう。

ひとつよりふたつ
ひとりよりふたり
きつとそのほうが自然なんだ
妻と並んで枝豆をたべる
星野富弘「枝豆」

水無月 夏至 茨城県 埼玉県

水無月 夏至 茨城県 埼玉県

長らくご無沙汰いたし申し訳ありません

長らくご無沙汰いたし申し訳ありません

岩垣若翠

(掲載手本90%に縮小)

- ◇ 小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の姓号を
- ◇ 用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇ 所定の出品券を作品の右下に貼る <審査会員を含む誰でも出品可>

(楷書) 水無月 夏至 茨城県 埼玉県

(楷書) 長らくご無沙汰いたし申し訳ありません

(行書) 水無月 夏至 茨城県 埼玉県

(行書) 長らくご無沙汰いたし申し訳ありません

基本用語

「水無月」旧暦6月の別称。「夏至」太陽が北半球では一年の内、昼が一番長くなる。

「水無月」旧暦6月の別称。「夏至」太陽が北半球では一年の内、昼が一番長くなる。

北半球では一年の内、昼が一番長くなる。

木一プロ作品
各部総評

NO. 732

漢字部 師範 新行内瑞華

ゆったりとした息づかいが伝わる。温雅で上品な風趣があり、心が安らぐ。渴線が美しく魅力的。

◎漢字部総評 上級は、行草書で、線の変化が美しい作品が多かった。師範クラスには、もっと創意ある作への挑戦を期待する。(萬城評)



漢字条幅部 師範 本柳 小直

筆に思いを託して書き込む姿が目に見えてくる。自由闊達な表現力が紙面に響き渡っている。

◎漢字条幅部総評 表現力豊かな作品が多かった。しかし、両を雨と書いた作品もあり、日頃、字書を引く習慣をつけましょう。(藤扇評)



前衛書部 特選 山崎 恵

どっしりとした中にリズム感溢れる作品となり、重厚な線と巧みな構成で紙面をうまくまとめた。

◎前衛書部総評 構成の工夫が感じられる作品が多くみえたが用紙をもっと選んでほしい。(誘韻評)



かな条幅部 師範 堀江 幸泉

身についた総合的美意識の高さから生まれる作品は見る者を和ませる。技術を越える力量が美事。

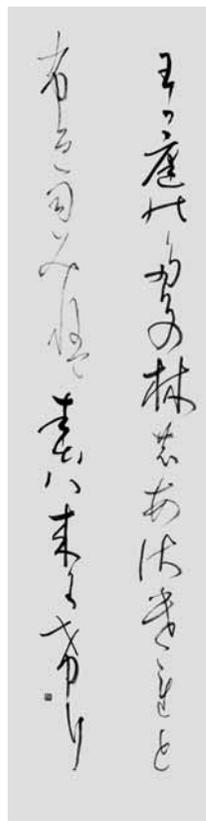


現代詩文書部 特選 西山 葵龍

文字が紙の中から湧き出て舞き塊となる。墨の潤濁、線の軽量が絶妙で余白の美しい作となった。

◎現代詩文書部総評 漫然と文字を書くのではなく、ネライを定めた作品作りを望む。(巨峰評)

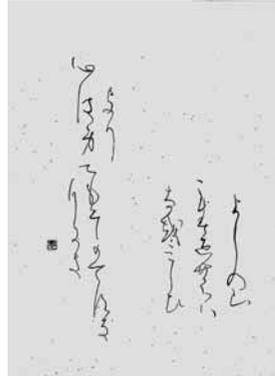
◎かな条幅部総評 手本はよく理解されていたが太細の変化のないものが散見で残念。浅の誤字多く知っている字も確認を求める。(明子評)



ペン字部 師範 藤田 月華
ペン先を活かし、流れや線の緩急を見事に表現した渾身の作。日頃の鍛錬に敬服。
◎ペン字部総評 楷書・行書各々よく書けていたが、行頭の不揃いや下部の余白が多すぎる作品あり。全体の配置に留意を。(孝子評)

蜂の羽音が
チユリッの花に消える
微風の中にひっそりと
客を迎えた赤い部屋
三好達治の詩 月華書

かな部 師範 加藤 翠陽
紙面に対しての字の大小、太細が最も秀れていました。リズム墨色共々しなやかな姿が美しく輝く。
◎かな部総評 料紙に書く方が増えて好ましい。上段は日頃から作品を書くつもりで緊張して臨みたい。写真版を参考に。(洋子評)





智米雅文綾
美杏悠枝雪
ホツとする構成の妙

濃墨と潤濁の比が見事
淡墨の美しさと曲直の妙
三部分が呼応し合い巧み
リズム感溢れる軽妙な作
大きな構えで広がりあり

選評 岡田 琇 韻

祥喜藍永蒼
風舟風
統一のとれた多字数作
枯淡な水墨画の世界の様
詩情をよく活かした表現
淡墨を研究した作、成功
筆触を楽しみながら書く

紅蒼清芳和
霞香耀博楓
思いきりの良い運筆見事
線質深く奥行きを感じる
筆が動き味わいある線質
墨量の変化自然で美しい
運筆の呼吸が聞こえる

桃美四沙麗
翠千峰莉流
筆が縦横無尽に動く
大小の字の調和成功作
筆の弾力最大限に發揮
横の動き大胆で爽やか
構成大胆、白に響く

孝風
キリッとした線心に響く
行を塊にしてまとめる
紙を挟むかの線質大胆
確かな力量を感じる作
章法が独特で楽しい

選評 大平 邑 峰

今月の

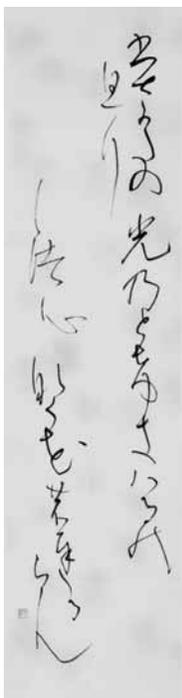
特別研究部優秀作品(特選)

選評 石井明子 東福青篁 山口仙草 片岡豪峰

小品の部

かな (奥田)

藤井紫香
「ひさかたの」



藤井紫香書

135×35cm

◆シンプルな線質を構成の妙で完成度の高い作品に仕上げた力作。半切が何とも大きく見えるではないか。
(明子評)

漢字 (大拙社)

畠中成山
「白居易詩」



畠中成山書

135×35cm

◆濃墨を使い、暢びやかな筆致の隷書作。古隷の持つ造形の豊かさが紙面に一貫として溢れている見事な作。
(豪峰評)

現代詩文書 (蓉花)

坂本蓉花
「東京」



坂本蓉花書

70×35cm

◆美しい淡墨の滲みと掠れが紙面に調和し、詩の内容と作品としての表現がマッチして、洒落た作品となった。
(豪峰評)

前衛書 (秀水会)

青木かよ
「震」



青木かよ書

135×35cm

◆リズム感に溢れ、全体の構成も見事。潤濁の變化もバランスよく明るい作品となり、好感がもてる。落款の位置一考を要す。
(仙草評)

〈小品の部〉

創作の部(35点)

漢字 4点

かな 6点

現代 16点

前衛 9点

臨書の部(37点)

漢字 35点

かな 2点

総出品点数

72点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

「かな」

白珠相内 珠莉

〔現代詩〕

香苑 小川 香燐

四枝 奥川 麗流

宗苑 茂木 絢水

〔前衛〕

蓮紅 大友 紅蓉

〔臨書の部〕

「漢字」

春城 東原 春城

紅瑤 原島 春汀

大雲 高武 弘文

高真 岩上 郁景

八街 十河 春景

澄春 土屋 恵仙

華祥 加藤 和栄

墨縁 井戸端 琉泉

澄春 深澤 佳月

大雲 名取 美紬

華祥 加藤 雅芳

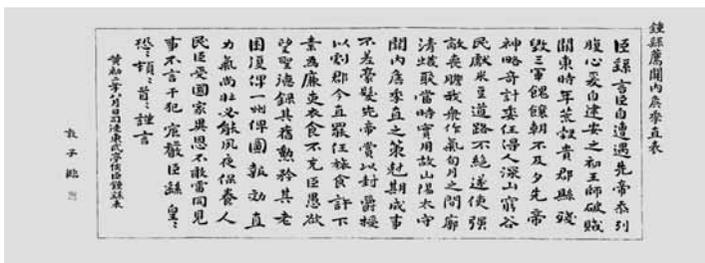
「かな」

英峰 吉瀬 彩雨

大作の部

臨書 (紅瑤)

相澤敦子
「薦季直表」



相澤敦子臨

50×137cm

◆横に広がる結体・抑揚に富んだ溫和な線質で鍾絲の書をおおらかに表現。落ち着いた安定感ある臨書作品。(青瑠評)

(青瑠評)

臨書 (清月) 境野和子 「高野切第一種」



境野和子臨

60×240cm

◆書き進めるほどに興が乗るといふ雰囲気は美事である。原典の魅力を越えて筆者の奥ゆかしさが伝わる。

(明子評)

部分拡大



漢字 (もくせい)

森田藤谷 「倦夜」



森田藤谷書

175×55cm

◆行間を充分にとり、筆鋒が冴えた洒脱な作品となった。緩急のリズムも爽快で白が美しく輝いている。(青瑠評)

前衛書 (青蓮)

山崎 恵 「希望」



山崎 恵書

180×60cm

◆リズム感のある躍動する筆致が心に響く作品となった。下部の線質の処理、印の位置一考を。(仙草評)

〈大作の部〉

創作の部(34点)

漢字 3点

かな 8点

現代 5点

前衛 18点

臨書の部(14点)

漢字 12点

かな 2点

総出品点数

48点

〈特選候補者〉

(創作の部)

「漢字」

八街 新村翠芳

「かな」

奥田 小林純風

奥田 山下香楓

水荃 清水蘭舟

「現代詩」

大雲 長島 櫻雨

もく 西川 藤家

「前衛」

秀恵 阿部 雅悠

月華 浅野 黄扇

四枝 大友 四峰

松風 西條 松雲

水壑 伊澤 菜々

花壑 高橋 奎媛

(臨書の部)

「漢字」

紅瑠 木暮 千晶

紅瑠 金井みどり

洞書 安藤 楊風

千葉 竹浪 叙舟

漢字研究部
(薦季直表)

選評 川島舟錦

今月のホープ作品



高木蒼信

漢字研究部 特選 高木蒼信

上位の皆さんは、特徴をよく捉えられていて研鑽を積んでいることを窺い知ることができました。ホープ作品は、ゆったりとした深さや広がりなどが表現できているところがよかったですと思います。

◎漢字研究部総評

隸書体から書体移行していく様を感じ、扁平な字形や多少の点画のつながりをも意識

しながら、さらに、線質のあたたかさや深さ、豊かさを表現できるような工夫が必要かと思えます。

次の段階にいくために手っ取り早いのは、墨はいつもより濃く磨って、少し柔らかめの筆を選び、ゆっくり筆を運ぶことでしょうか。半紙も、何種類かお気に入りを見つけておいて、墨と筆との相性や表現を加味しながら時間をかけて書き込むと楽しくなりそうです。



小樹臨 光悠紅蘭洋小
琴峰霞花子樹



唯一臨 秀黄里朱唯紅
子扇佳葉一雲



和竹清 彩惠清和竹
滯 雨泉耀栄鳳



妙和映 眞雄映和泰妙
華一紅香香華

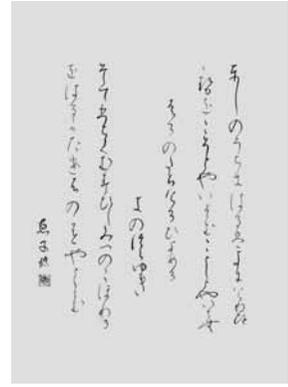


關東時年 荒穀 貴
郡縣 毀三軍 饑
饑朝不及 夕先帝
神略奇計 委任得
人深山 窮谷 澤臨

かな研究部
(高野切第一種)

選評 大辻多希子

今月のホープ作品



新井恵子

かな研究部 特選 新井恵子
織細で温かな線、優美な流れなど、よく特徴をとらえています。全体の潤濁も自然に表現され、見事な作品です。日頃の鍛錬による成果と思えます。
◎かな研究部総評
誤字もなく総体的に、よく書けていました。墨が濃すぎる作品が散見。特にかなの臨書は、連綿や濁筆部分で墨が濃すぎると、美しい流麗な線が書けません。注意が必要です。



玉佳美 佳寿幹 美幸紅 泰嘉香
泉恵梢 代美子 子生 子泉雨 峰江舟

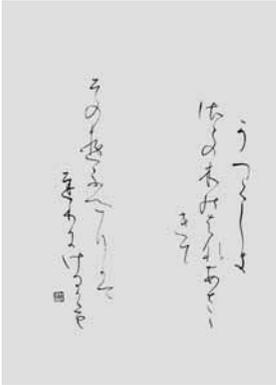
かな研究部成績表

竜正こ 泉華こ	たか I	光 彩	紅 瑤	秀 作(白墨)	白玉露 松本郷	高松本 坂本郷	大坂本 榎本郷	秀街本 六波羅	八木上 三松浦	澄春本 松浦美	竹美本 松浦美	清泉本 松浦美	橋雅本 松浦美	桜雲本 松浦美	大紅本 松浦美	う風本 松浦美	高崎本 松浦美	澄春本 松浦美	千葉本 松浦美	紅葉本 松浦美	菊瑤本 松浦美	新田本 松浦美	須田本 松浦美	香惠本 松浦美	
吳金田 豊真美	加藤翠 美	岩崎美 珠	藍川美 珠	松本郷 子	坂本郷 子	榎本郷 子	六波羅 子	三松浦 子	松浦美 子																
春汀 上利 啓子	正華 渡辺	京橋 吉田	高崎 矢口	桜草 守志	大葉 三浦	高崎 松浦	紅翠 松浦	墨翠 松浦	はせ 林美	上原 長谷	上海 根岸	青島 沼田	高崎 永通	泉島 中村	A松 寺原	清月 田中	電泉 高橋	若葉 下沢	書泉 七三	菊泉 佐々	大雲 坂本	素雲 高武	秀歌 小池	貞直 芳博	直子 子
もさ文松 くつ筆入	こ明やあ だ漢まか																								
新浅青 井川木	吉野千 櫻佳	山根中 山根中																							
縁正映 墨華映	映華映 墨華映																								
選外 高井	天璋 高井	東璋 高井	華璋 高井	無璋 高井	青璋 高井	蘭璋 高井	椿璋 高井	松璋 高井	黎璋 高井	幕璋 高井	幽璋 高井	生璋 高井	祥璋 高井	長璋 高井	華璋 高井	東璋 高井	正璋 高井	東璋 高井	大璋 高井	森璋 高井	麗璋 高井	一大璋 高井	蒼璋 高井	天璋 高井	
143 名氏	吉野 彩																								

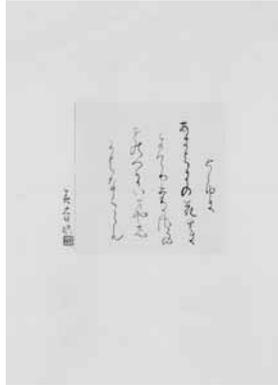
「書道芸術」 特別昇段級試験 師範合格者模範作品

かな部 第三種

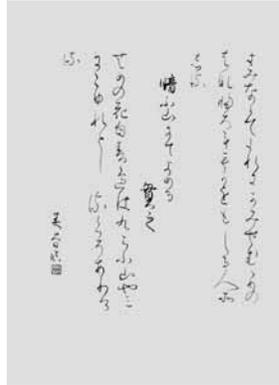
創作



臨書
(寸松庵色紙)



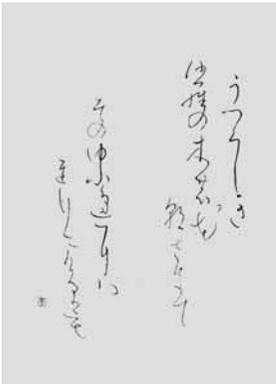
臨書
(関戸本古今和歌集)



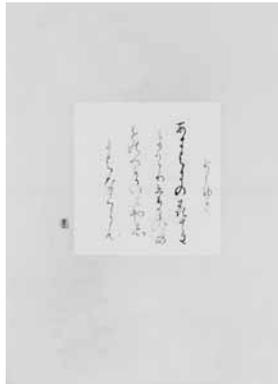
一弦 村上 美智恵
・臨書は特徴をよくとらえ、線質の違いも把握して確かな力量です。創作の清澄なリズムは気品溢れる。

(下谷洋子)

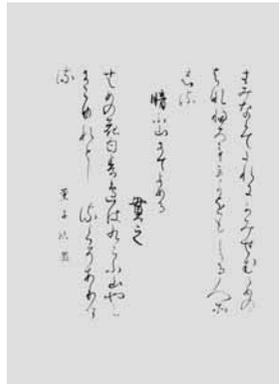
創作



臨書
(寸松庵色紙)



臨書
(関戸本古今和歌集)



東小 佐々木 薫子
・丁寧な運筆の古筆は2点とも美しく、仕上がりが、創作はその基本に従って、しなやかな表現となって見事。

(石井明子)

総 評

審査長

辻元 大雲

新型コロナウイルス蔓延の影響は未だ収束する気配を見せず、私たちを取り巻く社会環境は混沌とした状況が続いています。そんな不安定な日常が当たり前となった感があります。どこまで続くのか、やりきれなさが募ります。

「書道芸術」定例の昇段級試験は、春秋2回実施していますが、普段の練習の積み重ねがその結果に大きく影響します。コロナ禍の中、練習もままならない方もおられたことと思います。逆に家での時間にゆとりができて、落ち着いて取り組めた方もおられたと思います。

今回三種実施科目として「漢字条幅」「かな半紙」西部門を実施、他は二種まででした。年々応募数が減少し寂しい感がありますが、挑戦された方々の熱意はひしひしと伝わってきます。試験であるため昇段級の比率に厳しさがあるのはご理解下さい。

基礎表現力をよく養い、該当段級にふさわしい技術を身につけて下さい。

漢字条幅部 第三種

秦香 小木曾 秦香

八街 大日向 幽香

・のびやかで潤いのある筆致で、三体とも安定感ある鍛錬の作。基礎表現力の高さを感じる。

(辻元大雲)

楷書 創作

高柳下來垂處綠小
桃上去末梢紅

秦香書

行書 臨書(争座位稿)

右僕射定襄郡王郭之閔
下蓋太上有立德其次有

秦香書

草書 臨書(書譜)

何々爲解字出粗
傳教法見好溺偏

秦香書

各部短評

漢字

〈一種〉原帖の観察が深く、整った字形・伸びやかな横画や右払いなどの特徴をよく捉えている作品が多かった。

楷書 創作

高柳下來垂處綠小
桃上去末梢紅

幽香書

行書 臨書(争座位稿)

金紫光禄大夫檢校刑部尚
書上柱國魯郡開國公

幽香書

草書 臨書(書譜)

向規/起而程遠罔
負不怪習字如蓮

幽香書

「楷書の規範」といわれている孔子廟堂碑。ますますの研鑽を期待します。

(山口仙草)

〈二種〉「蘇慈墓誌銘」は端正な字形と、はつきりした点画を捉えた臨書作品が多かった。行書は落款まで一貫した運筆のリズムが大切。平素の行書臨書から滑らかな運筆を学びたい。(東梅屋真)

かな

〔二種〕 臨書に丁寧に取り組む姿勢が伺えました。しかし、墨色の変化のない作品、また簿すぎる作品も目立ちました。全体の行尾の位置も原帖をしっかり観察してください。(松村くに子)

〔二種〕 臨書は、大方良く書けていました。創作は文字の配分が難しいですが、構成上文字が大きすぎないよう心掛けましょう。目を見張る作品もありました。(木村東舟)

〔三種〕 臨書と創作の完成度にギャップが見られる人が多く残念。地道に古筆を学習してから創作に踏み込んでいくとレベルが揃ってくる筈です。学習方法を振り返って下さい。(石井明子)

漢字条幅

〔二種〕 半切1行書きは、太さや文字の大小など構成に工夫をした作品が多く見られた。作品のまとめの段階で古典の雰囲気を感じられる作品を心掛けて下さい。(片岡蒙峰)

〔二種〕 楷書の「皇甫誕碑」は切れ味鋭い筆法と端正な字形が特徴です。甘い線の作品が見られた。行書創作は字形のバランスの良し悪しで差が出たように思います。(三浦鄭街)

〔三種〕 高位になる程平素の練習の差が出てくる。日々の鍛錬を大切にしている。「争坐位稿」の臨書は原帖の観察を正確に、誤字が散見。楷書創作は字形の不安定さが目についた。(小竹石雲)

かな条幅

〔二種〕 全体にまとまりがでるよう漢字とかなのバランスに、気をつけてほしい。俳句は字数が少ないので、特に字の大きさ、組み合わせには工夫が必要です。(松村くに子)

〔二種〕 文字数の少ない俳句は、特に線質が目につきます。荒々しくならないように注意しましょう。和歌は、全体のバランスが大切です。動きの良い運筆を心掛けて下さい。(木村東舟)

ペン字

〔二種〕 行間が狭い作品があり、漢字かなのバランス・字配りに気を付けた。楷書は点画をしっかりと丁寧に書くよう心掛けて下さい。(東福青雲)

〔二種〕 楷書は伸びやかな筆致の作品が多くあり好感もてた。行書は優秀な作品もあったが、誤字も見られたのは残念。字典で確認し細心の注意が必要。用具用材にも配慮を望みます。(山口仙草)

「書道芸術」特別昇段級試験 師範合格者

かな

23名

漢字条幅

19名

道	A I	翠	鈴木	京橋	堺	縷縷	玉川	たか	書泉	誠和	こだ	蒼陽	もく	〃	千葉	上泉	菊月	紅風	長月	東小	一弦	
板倉見智子	寺原 恵子	下津 舟楓	関口やよえ	西村 松苑	野中 江春	石田 悦子	大橋 景子	雨宮 紫遊	鈴木 谿琳	久保 天鈴	北爪 美和	熊井 宏子	岡部 藤瓊	松嶋 節子	玉沢 幸子	早部 朗	島 悦子	田畑寿美子	原澤 典子	佐々木薫子	村上美智恵	
				慈空	樹原 葛 恵美	堺 利守由佳理	誠和 久保 天鈴	蒼原 横山 真葉	〃 大野 洋子	八街 丹 光風	もく 土橋 正博	附中 樋口 和梗	〃 加藤 洋子	大雲 小林 清香	聖壺 石毛 清子	芳蘭 小久保侑蘭	やま 中込 京花	〃 小泉 伶衣	千葉 林 晶子	望月みどり	八街 大日向幽香	泰香 小木曾泰香

おめでとう
ございました

書展

第10回 墨縁書展

併催：第10回記念特別企画原拓展

浅利雪蘭

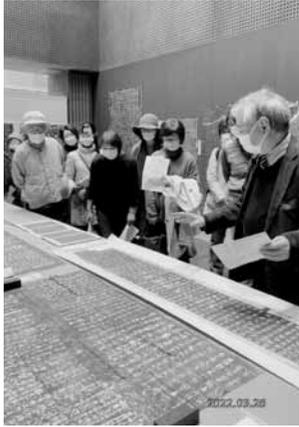
会期：令和4年3月26日(土)

28日(月)

会場：八戸市美術館

令和3年11月に新しくオープンした八戸市美術館において、第10回墨縁書展が開催された。書道芸術院北日本支局の会議の後、墨縁書道会会員のみなさんの力作と第10回記念特別企画「原拓展」を鑑賞する機会を得た。

真新しい会場には個性豊かな力作が並んだ。墨縁書道会主宰の田中扇溪先生の明るく品のある現代詩文書をはじめ



種谷萬城先生による原拓解説



会場風景

め、墨の色に工夫を凝らした作品や子どもたちの元気あふれる書に、訪れた人は足を止めて見入っていた。

併催の「原拓展」には、たくさんの原拓が展示され、見応えのある企画展であった。その中に、私が以前臨書したことのある「開通褒斜道刻石」があり、感慨深く鑑賞した。会場では種谷萬城先生による原拓の解説も行われており、多くの人が熱心に耳を傾けていた。また、原拓の横にはそれぞれ出土した場所の写真も展示されており、文字の壮大な歴史とロマン、そして書の奥深さを改めて感じた。

第38回 高崎書会

●会期 令和4年7月8日(金)～11日(月)
午前10時～午後5時
(最終日は午後3時まで)

●会場 高崎シティギャラリー
第1展示室・予備室
〒370-0829
群馬県高崎市高松町35-1
TEL 027-328-5050

●主催 白玄会 (会長) 金井如水

●後援
高崎市・高崎市教育委員会
(一社)群馬県書道協会・(一財)毎日書道会
(公財)書道芸術院・上毛新聞社
毎日新聞前橋支局

2022年 第6回

「みちのくの書人達」展 主催 伊呂波書の会

期日 令和4年7月19日(火)～7月23日(土)

午前10時～午後5時 (最終日23日は午後3時まで)

会場 アートサロン 毎日

〒100-8051 千代田区一ツ橋一-1-1 ☎ 03-3212-0321

出品者
会長 坂本素雪
理事 小原華杏
監事 山内松吾
会務局長 仁木光堂
会長 齋藤杏邑
副会長 金田泰山
事務局長 高橋珀令

武山 櫻子
佐々木 一峰
鈴木 英晴
(事務局員)
木村 笙園
須藤 雪蓮
小野 寺京紡
星川 桜香

菊田 杏仙
岩崎 陽光
浅利 祥紫
川村 素舟
市川 紫泉
及川 祥空
田澤 館楓
佐々木 蒼楓
河原 鵬燐
金野 翠苑
高橋 果蓮
阿部 菜

永井 鳳雪
坂本 素朴
熊谷 祥仙
鈴木 麗雪

浅利 雪蘭

鈴木 麗雪

●篆刻

【七月十五日締めきり】

〈出品規定〉審査会員を含む、誰でも出品可。

- ① 摹刻 (ア) 課題による語句 (イ) 原印自由 (出品の際、原印) のコピー添付
- ② 創作 語句自由

○印面の大きさは2.3cm(八分角)以内とし朱文、白文自由。

○印箋は市販のもの、半紙横 $\frac{1}{2}$ の大きさに切ったものも可。

○創作、摹刻とも応募は一人一点。

6月号 篆刻課題

〈原印コピー〉



趙之謙 (清)

◎出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の釈文を明記 並びに落款(氏名)を入れる。

732号篆刻優秀作品

篆刻



「譚平定」

特選 小沢華仙
原印観察、運刀の佳さ、どれを取って見ても出書中随一、秀逸。

選評 後藤大峰

創作



「鯉幟」

特選 中島義則
真摯な構成でしっかりと創作している。さらに研鑽を積まれない。

〈特選〉

◎篆刻部総評

創作部門に比し、摹刻の方が秀でた作品が目についた。摹刻は創作へのステップである。さらに精励され創作に挑戦してほしい。(大峰評)

秀作 (60書)	小映 金谷 皓洋 北日 成田 能喜 小中 林 淳一	特選	大雲 小沢 華仙	佳作 (60書)	芳琴 小野寺幸喜 大綱 片岡 豪峰 大雲 鷺山 美梢 文筆 関谷香代子 遊雲 中川 研治
入選 (60書)	高陵 井上 静香 丸山 加藤 妙子 香山 須賀澤 一起 香書 関口 天峰 大雲 高橋 永宣 生大 吉原 進 (選外なし)				

秀作 (60書)	石心 伊藤 祥花 石心 大沼 機峰 四枝 塚本 清麗 やま 橋本 清麗	特選	生大 中島 義則	佳作 (60書)	遊雲 赤星 文庵 水耀 伊澤 香雨 眩耀 佐々木 香霞 宗宛 茂木 絢水
入選 (60書)	唯一 逢沢 唯一 秀惠 阿部 雅悠 慈空 荒川 空華 声香 坂本 覚山 宮内 寿美子 (選外なし)				

送料

- 一か月の購読部数が一か月の購読部数
- 1部 79円
- 2部 95円
- 3部 103円
- 4部 119円
- 5部 135円
- 6部 151円
- 7部 167円
- 8部 183円
- 9部 199円
- 10部以上は 送料免除

コロナ禍の中、当分の間十時〜十六時に時間の変更しております。

※お問い合わせ、ご連絡は、月曜日〜金曜日九時〜十七時の間 お願いします。(土日・祝日は休み)

公益財団法人 書道芸術院

電話(03)3862-1954
FAX(03)3862-1957

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は
101-0031 東京都千代田区
東神田一-16-17
東神田プラザビル3階

定価 一部 七五〇円

令和四年五月二十五日印刷
令和四年六月一日発行

編集兼 発行人 辻元洋一 (大雲)
発行所 株式会社 リンクス
印刷 小沢写真印刷株式会社
〒101-0031 東京都千代田区東神田一-16-17
電話 (03)3862-1954
FAX (03)3862-1957
振替 00140-115015508
http://www.linso.co.jp/shogai/